

## 「変わらぬ態度」

布教教化部出版室長 蔵重宏昭

かつて学生の時分、大勢の学生が暮らす寮生活を4年間過ごしたことがあります。寮には恐らく定年後に職に就かれたと思しき年配の寮監さんがいらっしゃいました。外見は強面で近寄り難い雰囲気がありました。しかしいざ話をすると、若輩の私に対しても気さくに話しかけてくださる、また真っすぐ目を見ながら誠実に話される方でありました。ですので、私のみならず寮内生誰からも大変人気のある寮監さんでした。

ある時、配達の人が寮に届け物に来られました。すると寮監さんは、私たちと接する時と変わらずやさしく声がけし、労いの言葉をかけつつ玄関先まで見送られていました。

またある時、寮を運営する責任者がお見えになった際、やはり私たちと接する時と同様に気さくに談笑されている姿がありました。

それから寮に出入りされる方がたに対し、変わらぬ誠実な態度を示し続けられたことを今でも明確に記憶しております。しかし、当時はどうして相手構わず対応が変わらないでおられたのか十分に理解出来ませんでした。一方でそうした変わらぬ姿勢は「こうありたい」と思わせる模範でもありました。

変わらぬ姿勢の大切さが理解できたのは、それから数年後に修行道場へ赴いてからです。

道場では「威儀即仏法」の言葉通り、毎日の坐禅は勿論、お袈裟のかけ方ひとつ、食事の際の箸の上げ下ろしひとつ、寸分違わず行ずることを指導されました。

慣れない修行道場での日常で、繰り返し行えば次第に慣れスムーズに出来るようになることを一つ一つ実感したことです。「修行」とはまさに「行いを修める」こと、繰り返し自覚的に行うからこそ初めて身につく。こうしたことを私は学びました。

かつての寮監さんの変わらぬ態度も、そのことをご自身がお気づきになっておられたからだと思ったことでした。

巷では、ある時は店員さんに声を荒げ、またある時には上司に猫なで声を使い分ける人もいるように、場面に応じ態度をコロコロ変える場合を見受けられます。しかし、人間という生き物、本質的に実は器用に使い分け出来ません。思いもかけない場面で、自分の意に沿わない態度が表れてしまうのが良い例です。

変わらぬ態度で丁寧に行ずる本山の修行僧の立ち居振る舞いを間近で見て、かつての寮監さんを久しぶりに思い出したことでした。